

佳作

サッカーを通して

栗原 裕輔
くりはら ゆうすけ

常陸太田市立南中学校二年（茨城県）

ぼくは、サッカーが大好きで、小学五年生の四月から念願の少年団に入団した。みんなは、二年生の頃からやっているの、パスもドリブルもシュートもうまい。ぼくは最初の頃実力の差を見せつけられて、落ちこんでいた。とても悔しかった。その差を埋めるには、コーチから、

「自主的な練習を毎日する事が大切だよ。」

そうはげまされた。

ぼくは、みんなに少しでも追いつこうと、一生懸命練習した。父も会社が休みの日には、小学校のグラウンドでぼくと弟の早朝練習に付き合ってくれた。とてもうれしかった。

その練習のおかげで、試合にも長い時間出させてもらえるようになった。初めて試合に出た時は、うれしさよりも緊張の方が大きくて自分からボールにさわるうとはしなかった。でも他の仲間はただの練習とは違って、みんな勝つ為に真剣だ。ぼくは今迄仲間の事をあまり意識しなかった。でも実際、試合に出てみると、ミスした時に、

「どんまい、どんまい。今度は気を付けてー。」
うまくいった時は、

「ナイスパス、OK。その調子、その調子。」

そう仲間が声かけしてくれる。その仲間の声のおかげで、ぼくは何倍もの勇気とやる気をもらった気がする。サッカーは個人ではなく、チームでやるもの。大事なのはチームワーク、（仲間っていいな。）改めてそう思えた瞬間だった。

ぼくがサッカーを始めて、忘れられない出来事がある。それは、小学五年生の時の最後の公式戦の事だ。ぼくは、朝慌てていたのに、白いソックスを用意しないで出かけてしまった。今迄一度もはいた事のない白いソックス。しかし、その日に限って、対戦相手のユニフォームの関係から、ぼく達のチームが、白いユニフォームと白いソックスで試合に出る事になったのだ。ぼくはコーチに、

「裕輔は、プロとして失格だぞ。公式戦は、プロのサッカー選手と同じルールで試合をするんだ。だから、この試合には出場させない。」はつきりそう言われてしまったのだ。悔し涙をふきながら、練習だけは参加させてもらった事も覚えている。ルールの厳しさを初めて知った気がした。

今思えば、コーチのあの言葉は、とても辛く厳しかったけど、自分自身に必要な事を見つめ直す絶好のチャンスだったのかもしれない。あの悔しさから逃げず、自分自身を信じる心を持ってサッカーを続けていきたいと思った出来事だった。

ぼくの所属しているサッカー部も、一人一人の動きが連携し、一つの輪となって戦う事によって、勝利への方程式がつくり出されてきた。その結果、今年ぼく達サッカー部は、南中歴史上初の県大会に出場する。

ぼくは、サッカーというスポーツを通して、たくさんの人と出会う事でかけがえない今を生きていけるのだという事を確信した。

これからぼくは将来、様々な困難に直面する事だろう。そんな時、がんばった過去の自分が心の支えとなり、誇りと自信を持って生きていける気がする。

「もつともつとサッカーを好きになり、ボールに触ればもつと上手くなる。」

このコーチの言葉を信じて、ぼくは今日も走り続ける。